

「この方に触れさえすれば」

マタイによる福音書 9:18-26

コリントの信徒への手紙1 1:18

2026年2月15日

野村 友美 師

<「この人に触れさえすれば」>

新しいぶどう酒は新しい革袋に入れるものだ。

同じように、神様がくださる新しい恵みは、日々新しい思いで受け取って味わうものだ。

そんな話をイエス様がしておられたまさにその時、一人の男性がイエス様に近寄ってきて、ひれ伏してこう訴えました。わたしの娘がたった今、死んでしまいました。でも、あなたが手を置いてやってくだされば、娘は生き返ります。

いきなりやって来て、とんでもないことを言い出したこの人は、イエス様がおられたガリラヤ地方のカファルナウムという町の指導者でした。他の福音書では、この父親は会堂長、つまり礼拝所の責任者だったと説明されています。

神殿は首都エルサレムにしかありませんでしたから、人々は普段は自分たちの町の会堂で、礼拝をしたり聖書を学んでいたんです。

マタイがこの父親を「指導者」と呼んでいるのは、おそらく彼が町の人たちのリーダーでもあったということでしょう。信仰の面でも生活の面でも、人々を指導したり相談に乗ったりと面倒を見て、みんなから一目置かれる存在だったのだと思います。そういう人がイエス様の足元にひれ伏して、しかも「死んだ娘に手を置いてやってください、そうしたら生き返ります」なんて言い出したんです。周りにいた人たちは

きっとビククリして、「ああ、かわいそうに。きっと悲しくて混乱しているんだな」と思いながら、この指導者の様子を見つめていたんでしょう。

死んだ娘に手を置いてやってください。この父親の頼みは、少なくとも当時のユダヤ教からしたらとてもあり得ない、常識外れのことだったからです。死んだ娘に手を置くということは、死体に触るということです。イスラエルの律法では、死体に触った人は「汚れる」と定められていました。もともとは病気に感染することを防ぐための掟だったんですが、とにかく律法が「汚れる」と言っているものにわざわざ触るなんて、とても考えられないことだったんです。

どうしてこの父親が「イエス様に手を置いてもらえば、死んだ娘が生き返る」と思ったのか、その理由はわかりません。イエス様が重い皮膚病を患っていた人に手を触れて癒やしたり、弟子のペトロの姑の手を触って熱病を癒やしたりなされたことを聞いて、思いついたのかもしれませんが。

重い皮膚病の人に触るのも、律法では「汚れる」とされることでしたし、熱病だって感染するかもしれない病気でした。

このイエスという人は、今までの決まりごとや常識を飛び越えて、不思議なやり方で人々を癒やして助けておられるじゃないか。だったらきっと、死んでしまったうちの娘だって助けられるに違いない。

「この人に触れさえすれば」。

そう思ったら、もういても立ってもいられなくなっただけでしょう。いつもは町の人たちに「汚れを避けて、清くありなさい」と教えていた指導者のはずなのに。

この父親は、死んだ娘に手を置いてくれるように頼むぐらい、なりふり構わずイエス様にすがりついたんです。そんな彼の必死さと信頼に、イエス様はお応えになりました。すぐさま立ち上がると、イエス様は弟子たちと一緒にこの父親の後をについて行きます。死んでしまった彼の娘に、手を置くために。

<癒やしの「事件」>

その途中で、一つの事件が起こりました。

出血が続く病気を12年間も患っていたある女性が、イエス様の服の房に触ったんです。

これもまた当時のユダヤ教では、律法破りのあり得ない出来事でした。旧約聖書のレビ記の中に、出血している女性の「汚れ」についての規定が書かれています。出血している間は、その女性本人だけじゃなくて、彼女が触ったものが全部が汚れる。そういう規定でしたから、出血している女性は礼拝の場所に行くことも、人混みの中に出ることも禁じられていました。それどころか、家族と同じ場所で生活することも難しかったようです。

そんな状態が12年間続いていたというんですから、この女性がどれほどの苦しさや悲しさや不自由さを味わっていたか、とても想像しきれないものじゃありません。もちろん彼女も家族も必死で、何人ものお医者さんを頼って、ありとあらゆる治療を試したことでしょう。この女性が裕福だったのか、それとも貧しかったのか、詳しい状況はわかりませんが、病気の治療にはとにかくお金がかかります。できる限りのことを尽くして、でも結局は12年もの間、彼女は「汚れた」存在として隔離されて生きるしかなかったんです。

出血が続くというのは、生きる力が少しずつ

削られ続けるようなものです。体はいつもだるくて重たくて、なかなか元気が出せません。その上に、この女性は自分自身も、自分が触ったものも「汚れている」と扱われて、避けられて、家族とさえ触れ合うことができませんでした。どんなに辛くて孤独だったか、どんなに体と心が傷ついていたかと思います。

そして、そんな彼女もまた、あの死んでしまった娘の父親と同じように、イエス様の噂を聞いて思いついたんでしょう。

「この人に触れさえすれば」と。

イエス様が着ておられた服のすそには、律法にしたがって4つの房飾りが付いていました。服の四隅に房を縫いつけて、それを見るたびに神様の掟を思い出して、心と生活を信仰深く保つようと律法で勧められていたんです。

まるで律法の象徴のようなその房に、律法で「汚れている」と宣告された女性が触った、というわけです。これはある意味、小さな革命とも呼べる行動でした。「汚れている」、神様にふさわしくないと言って、私を神様から引き離す律法なんか飛び越えて、どうか私を救い出してください！そんな叫びが、この女性の行動から響いてくるように思います。

それでもイエス様本人には気づかれないように、後ろからそっと触ったのは、町の指導者やイエス様の弟子たちが、イエス様のそばにいたからでしょう。正面から行って、もし彼女が「汚れた」存在だと知られたら、イエス様にたどり着く前に彼らが邪魔をして、追い返されてしまうに違いありませんから。

とにかく「この人に触れさえすれば」とい

う一心で、この女性はイエス様の服の房に触ります。

彼女の無言の叫びは、イエス様に届きました。イエス様は振り返って彼女に正面から向き合うと、その姿をご覧になります。長年出血が続いていたこの女性は、きっと貧血で、そして律法を破って触ってしまった申し訳なさと、責められるかもしれない恐怖で、真っ青になって震えていたことでしょう。

苦しんで傷ついて疲れ果てた心と体を抱えて、「この人に触れさえすれば」と必死でイエス様のところにたどり着いた彼女に、イエス様は「娘よ」と優しく呼びかけました。「娘よ、元気になりなさい。あなたの信仰があなたを救った。」

そのとき彼女は治った、とマタイの福音書はとても短い言葉で、この癒やしの出来事を伝えています。

「この人に触れさえすれば」とイエス様に信頼して、期待して、他のいろんなことをかなぐり捨ててすがりついた彼女の思いと行動を、イエス様は「信仰」と呼ばれました。

彼女の「信仰」。

「イエス様を通して、きっと神様が私を救ってください」という彼女の信頼と期待と行動を、神様が「信仰」と認めて応えてくださった。そうイエス様は宣言して、その宣言どおりに彼女は癒やされたんです。

そしてもう一人の「信仰」に応えるために、イエス様はそのまま歩き続けて行かれます。指導者の家に着くと、そこではすでに死んだ娘の弔いが始まっていました。笛を吹く者たちというのは、葬儀のために雇われた人たちです。

悲しげな音色で笛を吹く人や、泣き叫ぶ女性を雇うのが、この時代のイスラエルでの一般的な葬儀の習慣でした。そういう雇われた人たち

や、葬儀のために集まっていた人たちに向かって、イエス様は言われました。

「少女は死んだのではない。眠っているのだ。」

このイエス様の言葉を聞いて、人々は「なんて馬鹿なことを言うんだ」と嘲り笑います。実際、父親が最初に言っていたとおりに、その少女はすでに死んでいる状態でした。葬儀の準備をしていた人たちからすれば、イエス様の発言は場違いで常識外れにしか聞こえなかったでしょう。

そのまま追いつかれなかったのは、少女の父親である指導者が連れてきた人だったからです。娘を亡くした父親への同情もあって、人々はそれ以上イエス様に逆らうことはなかったようです。

群衆を外に出すと、イエス様は家の中に入って行って、死んでいる少女の手を取りました。すると少女は起き上がった、と福音書はここでも短い言葉で、この驚くべき奇跡を伝えます。

<この方に触れさえすれば>

ナザレのイエスは病気を癒やしただけじゃなくて、死んでいた人までよみがえらせた。不思議という言葉だけでは片付けられないこの事件は、あっという間に人々の噂になって、ガリラヤ地方一帯に広まりました。

イエス様の評判はイスラエルの権力者たちを刺激して、やがて十字架の出来事へと繋がっていくことになります。決まり事や常識を飛び越えて引き起こされることは、それがどんなに喜ばしいことでも、多くの人を動揺させて、恐れや反発を生むものです。

発酵して膨らみ続ける新しいぶどう酒を、

古い革袋が受け止めきれないように。

人々の恐れや反発を向けられるようになることは、誰よりもイエス様ご自身がいちばんよく分かっておられたでしょう。

「死んだ娘に手を置いて、生き返らせてください」なんていう無茶な頼みは、断ってもよかったです。生き返った少女だって、いつかはまた死を迎えることになるでしょう。

わざわざ波風を立てなくたって、もっと賢く人々を味方につけて、救い主として上手に受け入れさせることも、イエス様にはできたはずで

す。でもそういうやり方を、イエス様はお選びにはなりません。いえ、「選べなかった」という方が正しいかもしれません。

「この人に触れさえすれば」と必死ですがりついたあの父親を、そしてあの出血が続いていた女性を、イエス様はお見捨てにはなれませんでした。

「イエス様を通して、きっと神様が私を救ってください。」そう信じて、ただイエス様に頼ってすがりつく人を、黙って見捨てられるような救い主じゃないんです。

誰もが避ける汚れに触って、人々の恐れや反発にさらされて、それでも助けを求める一人ひとりに「元気を出しなさい」と手を触れて、立ち上がらせてくださる救い主。それがイエス・キリストという御方です。

「十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力です」
(1コリント1:18)

と、使徒パウロが告白したように。

ただ神様からの愛を信じて、イエス様に救いを求めてすがりつく人は皆、神様の力を知ることになるんです。私たちの予想も常識もすべてを超えて、私たちを救うために働かれる神様の力を。

「この人に触れさえすれば」とすがりつく人たちを見捨てなかったイエス様の行動は、愚かなことだと批判されて、イエス様を十字架の上へと追い立てました。

神様の愛を無視して、神様の思いを踏みにじる、そんな私たちすべての人の罪を背負って、救い主は十字架で死なれました。そしてそこから復活の出来事が、死をも超える新しい命の恵みが引き起こされたんです。

「この方に触れさえすれば」とイエス・キリストにすがりつくなら、誰もがキリストと共に復活の命を生きる者とされる。

「この方に触れさえすれば」、神様からの愛と救いを受け取ることができる。

これこそが、2千年にわたってキリスト教会が伝え続けている良い知らせ、「福音」と呼ばれているものです。

今週の水曜日から、今年もイエス・キリストの十字架の出来事を思い起こす受難節、レントの期間に入ります。

独り子の命を犠牲にしても、私たちすべての人を救おうと願ってくださった神様の愛に改めて心に向けて、私たちはご一緒に祈りながらレントの時を過ごしていきましょう。

「この方に触れさえすれば」の良い知らせを、この世界で共に生きるすべての人に届けることができますように。

お祈りいたします。